

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 兵庫県神戸市中央区加納町6-5-1
管理機関名 神 戸 市
代 表 者 名 市 長 久 元 喜 造

令和2年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月23日(契約締結日)～令和3年3月31日

2 拠点校名

学校名 神戸市立葺合高等学校
学校長名 大 野 毅

3 研究開発名

Society 5.2の世界を見据える超未来型グローバルリーダーの育成

4 研究開発概要

SGHの成果を踏まえ、新たな資質・能力を加えた「超未来型グローバルリーダー」育成を目標とする。Society 5.0において、かつて経験のない課題と対峙する局面では、普遍的な正義感を抱きながら、新しい価値観を創造できる人材が必要である。その人材にはAIなどの最先端技術を駆使しながら、新しい発想に基づく産業などを創造する力が求められているのではないだろうか。本事業では、若竹のようなしなりを有し、受容・批判・主張に対して高度なバランス感覚を保ちながら、他者との協働をリードできる人材育成を目指すものである。そのために新カリキュラムとネットワークを設定し、国内外の各機関と協力し、それらを有機的に結びつける形でALを構築することを考えている。その集大成として、「ワールド・ワイド・コンファレンス(WWC)」を開催したい。目指すはSociety 5.0にとどまらず、その先にあるSociety 5.2の世界を見据えることができる超未来型グローバルリーダー育成の場である。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① WWL 運営指導委員会の開催						15日			28日		
② WWL 推進支援チーム(委員会事務局)による支援	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
③ WWL 担当事務補助員の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
④ 帰国・外国人講師等の雇用及び葺合高校への派遣	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑤ 葺合高校へのALT 配当増	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→
⑥ インターナショナル・コンファレンスに係る支援	→	→	7・8・9日	→	→	→	→	→	→	→	→
⑦ カリキュラムアドバイザー指導	→	→	→	6日	→	22日	5・6・12日	25日			
⑧ 副市長高校授業視察							6日				
⑨ AI 翻訳事業に関わる支援					→	16日	27日	11日	22日	→	→
⑩ ニュージーランド水泳オンライン交流事業に関わる支援				→	→	3・5日	→				
⑪ バルセロナ研修に係る支援				→	→	→	→	3日			
⑫ 全国高校生フォーラムへの支援					→	→	→	20日			
⑬ WWL 課題研究交流発表会に係る支援			→	6日	→	→	→	25日			
⑭ WWL フォーラムに係る支援			→	→	→	→	→	→	28日		
⑮ WWL 検証委員会の開催									29日		

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組むための「WWL 推進委員会」を毎月開催した。また本年度、連携校、協働機関との情報共有と連携を促進するために、担当者等を招集し「神戸 AL ネットワーク会議（仮称）」を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響による臨時休業もあり、実施することができなかった。そこで臨時休業とも合わせてオンライン会議を実施するためのアカウントを各校担当者に配布するなど、環境整備を行い、7月に5つの国と地域をつないで、国際会議を実施することができた。葺合高等学校において12月25日に開催される「第2回 WWL 課題研究交流発表会」の実施にむけて、8月6日に兵庫教育大学の西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、共同実施校教頭、拠点校担当者等を招集し、「運営委員会」を開催した。運営委員会では、本年度の発表会の実施形態や、実施方法、各校からの発表グループ数などの検討・協議を行った。9月10日にカナディアンアカデミー学長と拠点校校長が連携校の締結をし、10月には神戸市立六甲アイランド高等学校が連携校に加わった。
- b. 毎月開催される神戸市立高等学校長会において、管理機関より拠点校と共同実施校における、WWL 事業の取組の進捗状況等の情報共有がなされた。また拠点校より、連携校等への情報を共有する体制を整備した。その成果として、12月に葺合高等学校を拠点として12校をオンラインでつなぎ「第2回 WWL 課題研究交流発表会」を開催し、拠点校、共同実施校、連携校、及び近隣のSSH指定校等が共に学びの成果を発表し、交流することができた。
- c. 学校教育課長を中心に構成した「WWL 推進支援チーム」において以下のような支援を行った。(1)文部科学省からの情報の提供、(2)文部科学省へ拠点校、共同実施校の取組に関する連絡、(3)他の神戸市立高等学校・中学校への拠点校、共同実施校の取組の広報活動、(4)WWL 運営指導委員会の開催および準備、(5)WWL 検証委員会の開催および準備、(6)拠点校、共同実施校の実践に関する助言、(7)令和2年度開催の「インターナショナル・コンファレンス」「World Date Viz Challenge 2020」に向けた準備・実施、(8)オンライン環境の整備を行い、拠点校、共同実施校の取組がさらに充実したものとなるよう支援を行った。拠点校の校長は、教員に対し WWL 事業の説明会や教育研究所特別研究員による授業改善の研修会などを開催した。
- d. 「WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業実施要項」における事業の運営に関して専門的な見地から指導、助言を求めることを目的として、令和2年度は「神戸市立高等学校 WWL コンソーシアム構築支援事業運営指導委員会」を2回(第1回10月15日、第2回1月28日)開催した。運営指導委員会において、(1)事業の内容及び研究方法に関すること(2)事業の研究成果と課題に関すること(3)その他事業の目的を達成するために必要な事項に関すること等について、神戸市立高等学校の取組がさらに充実したものとなるよう、運営指導委員から助言等を得た。また、事業の実施状況を検証することを目的として、「神戸市立高等学校 WWL コンソーシアム構築支援事業検証委員会」を令和3年1月29日に開催した。検証委員会において、(1)取組の進捗状況に関すること(2)評価検証のための観点・基準に関すること(3)取組の成果に関すること等について助言を受けた。その後、検証委員に報告書を作成して頂いた。
検証のために、拠点校では、Neo MAKS12 の力に関する4件法を中心とした調査を1年生対象に6月と2月、2年生対象に2月、3年生対象に12月に実施した。それぞれの取組の後には、生徒の振り返りの文章を記録として残している。

- e. 卒業生が近況報告のために母校を訪れることは度々あり、中にはアメリカやイギリスなど海外の大学に入学し、グローバルに活躍している卒業生もいる。しかし、管理機関がこういった卒業生の成長過程を追跡調査する仕組の構築にあたっては、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ慎重に対処する必要があり、その方法については現在も模索中である。
- f. 神戸市教育委員会は、外国人児童生徒及び保護者等を対象に、日本の学校制度や進学などの情報について、日本の学校への就学についての悩みなどの相談に応じる目的で、「外国人児童生徒にかかわる就学支援ガイドンス」を実施した。

【財政等支援】

- a. 新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの事業がオンライン実施となったため、委託費費用を行った。そのため管理機関が自己負担額として、計画段階よりさらに計上する必要性は生まれなかった。
- b. 拠点校葺合高等学校に対して、令和元年度同様に ALT の加配を継続した。
- c. 国の委託終了後も事業を継続的に実施するため、「高校生国際会議」を実施するための海外姉妹校等生徒・教員招聘費用、また神戸市の姉妹都市バルセロナ市で開催する「World Data Viz Challenge」に参加するための渡航費用等を、神戸市教育委員会及び他部局とも協議しながら予算化に向けた調整を行っている。

【AL ネットワークの形成】

- a. 令和2年度は神戸市立高等学校における拠点校、共同実施校のコンソーシアムの強化・発展を第一目標とした。具体的には神戸市教育委員会 WWL 推進支援チームの下、「運営指導委員会」を2回開催し、令和元年度の取組内容を共有し、令和2年度の課題を明確にするとともに、令和3年度の方針を協議した。また、西岡伸紀カリキュラムアドバイザー、拠点校、共同実施校担当者等を8月6日に招集し、12月25日に葺合高等学校を拠点とする「第2回 WWL 課題研究交流発表会」のオンライン実施に向けた運営委員会を開催した。
- b. **【有効な事業実施】** および **【新たな共同事業】** について
 - ・ 12月25日に葺合高等学校を拠点に「第2回 WWL 課題研究交流発表会」をオンラインで開催し、共同実施校、連携校や近隣のSSH校等が参加した。普通科、国際科、商業科、工業科、総合学科という各校の特色に基づいた研究発表をすることにより教員と生徒の学びを深めることができた。
 - ・ 科学技術高等学校と葺合高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボと協働し、神戸市の姉妹都市バルセロナ市とオンラインで「World Data Viz Challenge 2020」に取組み、参加生徒はプレゼンテーション動画の視聴や意見交換を通してバルセロナ市のデジタルガバメントやオープンデータの取組について学んだ。
 - ・ 葺合高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボ、株式会社 NTT ドコモ、株式会社みらい翻訳と協働し「神戸市ドコモ AI 翻訳実証事業」に取組んだ。
 - ・ 拠点校、共同実施校、連携校の水泳部生徒が、神戸市文化スポーツ局国際スポーツ室と連携し、「東京オリンピック競泳ニュージーランド代表選手とのオンライン交流会」を実施した。

- ・ 科学技術高等学校が、神戸市企画調整局つなぐラボ、日本マイクロソフト株式会社、株式会社神戸デジタル・ラボ、株式会社NTTドコモと連携し、神戸市にある日本三大夜景に数えられる摩耶山掬星台における課題解決に取組み、探究活動を深めている。
 - ・ 科学技術高等学校が、「防災」の授業を通して神戸市消防局などの外部機関と、化学分析の分野においては神戸市内の酒造関係企業と連携した。
 - ・ 神港橋高等学校が、神戸市兵庫区役所と連携し「兵庫区未来会議」に参加し兵庫区の課題解決に取り組んだ。
 - ・ 神港橋高等学校が、ブレーンヒューマニティなどのNPO団体と協力し課題研究の授業充実を図った。
 - ・ 須磨翔風高等学校が、「教育」という教科の特長を活かし小学校や幼稚園との連携を図るなど、生徒のキャリア教育の充実を図った。
 - ・ 六甲アイランド高等学校が、神戸市東灘区との連携を図り探究活動へとつなげる構想である。
- c. 令和2年度は、IT企業のOPTiM、国際保健機関のWHO神戸センター、国内の大学やフィリピンのアテネオ・デ・マニラ大学、さらに多文化共生社会の推進を支援するNPOなどによる対面やオンラインの講義を提供することができた。生徒たちは、AIを効果的に活用する改革、新型コロナウイルスの世界への影響、SDGsが投げかける社会課題とその解決への実践を学び、社会の問題を自分ごととして考える機会を得た。令和元年度は、JICAのインターンシップやフィリピンでのフィールドワークを通して、視野を広げ考察を深めることの大切さを知った。自分のテーマをもって課題研究を進め、拠点校を中心とするALネットワーク運営組織が企画した高校生国際会議（5つの国と地域をつなぐ）で、海外の同年代の高校生と意見交換をし、自分たちができる問題解決への行動計画を作成した。拠点校の修了生たちは一連のプログラムに参加することで、国際的社会課題に強い関心を持ち、大学では国際関係、経済、法律分野を学び、将来はその専門分野を海外留学によって深めることのできる進路選択をしていると考えられる。令和2年度はコロナ禍のため、海外の大学を目指した生徒も大半は国内の大学への進学に変更した。令和2年度の修了生は、この完了報告書作成段階ではまだ進路が確定していないため、令和元年度の修了生（1・2年時SGH、3年時WWLの78名）を取り上げると、国内外のSG大学、並びに海外の大学への進学者数は34名（44%）であった。共同実施校においても複数名の生徒が、このALネットワークを介しての学びが、生徒の進路選択に大きな影響を与えたという回答を得た。
- d. 兵庫教育大学大学院教授 西岡伸紀氏をカリキュラムアドバイザーに委嘱し、拠点校及び共同実施校に対して定期的に研修・協議・指導助言を仰いだ。令和2年度から拠点校で開始された学際的科目「学際国語」と「学際リサーチ」への指導助言及び拠点校、共同実施校、連携校における課題研究の指導等の機会を設定した。
- e. 令和2年7月に行ったWWL International Conference Online 2020では、拠点校とスウェーデン、オーストラリア、台湾、フィリピンの姉妹校、カナディアンアカデミーの教員と生徒をオンラインで繋ぎ、「リスクマネジメント-新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」をテーマに5つの分野に分かれてディスカッションを行った。その準備として、休校期間中の5月からメールやインターネットの掲示板を利用して、調査研究やプレゼンテーションの準備を進めた。オンラインの時間は2時間と制限があったので、プレゼンテーションは事前にMicrosoft Teamsを活用して6校間で共有した。2学期からは、会議で話し合われた解決策を具体的に行うAction Planを作成し、神戸市副市長が来校したときには、高校生による経済支援やDVの防止について英語で発表を行った。

- f. 令和2年度の拠点校、共同実施校、連携校の取組教員や生徒の間で学び合う機会を設定することと、連携機関に発表することを目的に1月に第2回WWLフォーラムを拠点校で開催した。5・6限目は学際的科目である、「家庭基礎」（1年）「情報の科学」（1年）「グローバルスタディーズIA」（1年）「グローバルスタディーズII C」（2年）、令和2年度から開始された「学際国語」「学際リサーチ」の計6科目の授業を公開した。7限目は探究活動の発表として、1年生は、総合的探究の時間の取組み、2年生は「グローバルスタディーズII B」「学際国語」「学際リサーチ」で取組んだ課題研究、3年生は国際会議の議論とその後の活動について、共同実施校3校と連携校1校も参加し、3つの発表の後はグループディスカッションを行った。令和2年度は緊急事態宣言下の開催のため、公開人数を限定して実施した。
- g. コロナ禍のため4・5月は学校が休校になり、令和2年度は国内外の大学・国際機関・企業・自治体・NPOなどに講義やワークショップを依頼できるか心配したが、学校再開直後の6月下旬にWHO神戸センターの茅野医務官に”Global Health Development and COVID-19 Pandemic”というタイトルで英語によるオンラインの講義をしていただき、生徒から予定時間を超えて質問が続いた。ALネットワークを継続発展させるために、IT企業（株式会社OPTiM）による講演会やオンラインワークショップ（Google主催）を実施した。令和2年度の講座は対面とオンラインを併用して、国際機関2講座、国内大学10講座、海外大学3講座、企業2講座、自治体5講座、NPO3講座の計30講座を開催することができた。さらに1年生対象には「探究の日」を設定し、グローバルな課題解決に取組み、国際機関、企業、NPOや自治体による対面やオンラインでの13講座を開講した。
- 拠点校が企画運営した高校生国際会議（WWL International Conference Online 2020）はオンラインで、5つの国と地域の合計175名の生徒が参加し、WWLフォーラムでは、共同実施校生徒も参加した。多様な分野の発表を聞き、考察を深めることができた。また、拠点校主催のWWL課題研究交流発表会の開催にあたっては、11校と事前の情報共有と綿密なリハーサルを行い、当日はインターナショナルスクールを含め生徒160名が、オンラインでの発表とディスカッションに取組むことができた。今後もオンラインと対面のそれぞれの良さを活かしたハイブリッドのネットワーク運営の可能性を探っていきたい。
- h. ・神戸市は、国立大学法人神戸大学と連携協定を、甲南大学、神戸学院大学とは包括連携協定を締結している。
- ・葺合高校は、ウエストボーングラマースクール（オーストラリア）、グローブアカデミー（スコットランド）、サマミッシュ高校（アメリカ）、フェニックス高校（スウェーデン）、臺中市立臺中第一高級中等學校（台湾）と、姉妹校協定を締結している。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目												
拠点校	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
①学際的カリキュラム ・マネジメント 学際的科目実施 1年：探究・家庭基礎・ 情報の科学・GS IA 2年：探究・学際国語 ・学際リサーチ GS IIB ・GS IIC 3年：探究・GS IIC		授業開始		学際カリ キュラム 教員研修	探究講義 (1年)		リスクマ ネジメン ト講義(1 年) 学際カリ キュラム 教員研修		探究の日 (1年) WWL フ ォーラム (学際的科 目公開) 探究発表 (1,2,3年)			
②事業共同実施校・連 携校とのネットワー ク作り				課題研究 合同研修	カナディ アンアカ デミー連 携協定	六甲アイ ランド高 校連決定		WWL 課 題研究交 流発表会	WWL フ ォーラム 生徒発表			
③社会に開かれた高度 な学びのネットワー クの構築		国際機関 (WHO)オ ンライン 講義(2,3 年)			AI 企業講 演(2年) NPO 講演 (2年)	大学(兵教 大)リスク 講演 (1年) 神戸市 AI 翻訳プロ ジェクト	大学(兵教 大)課題研 究(1,2年) 大学(神外 大)課題研 究(2年)	NPO 講演(1年) 大学(神外 大)英語ス ピーチ講 演(1,2年)	探究の日 国際機関、 企業、 NPO 等 19 機関 (1年)	NPO 講演 (1年)自治 体 WS(1 年)	海外大学 (アテネオ デマニラ) 教授講義 (1,2年)	
④協働グローバル創造 事業 (全てオンライン)			IC(海外姉 妹校4校、 国内連携 校1校)				Focus(立 命館宇治 高校)6名	アジアユ ースリー ダーズ(イ オン)3名 WWL 課 題研究交 流発表会 (12校参 加)	神戸コミ ュニティ フォーラ ム (1,2,3 年)	Focus(立 命館宇治 高校)4名	探究甲子 園(関学)3 名 国内フォ ーラム(広 島県教育 委員会)3 名	
⑤「Neo MAKS」カ の検証(事業毎に振り返り)	調査(1年)							比較調査 (3年)	調査(1,2年) 分析・検証			

IC(インターナショナル・コンファレンス) WS(ワークショップ)

(2) 実績の説明

- a. 本事業では社会的課題全般である「リスク」を共通テーマとし、探究活動、学際的科目、国際ナショナル・コンファレンス等でそれぞれテーマを設定した。特に令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大における「リスクマネジメント」が中心テーマとなった。7月に開催したオンラインによる高校生国際会議（WWL International Conference Online 2020）では「リスクマネジメント - 新型コロナウイルスによる世界危機における国際協力のありかた」をテーマに「情報」「経済」「教育」「健康」「人権」の分野におけるそれぞれの国や地域の課題について情報共有し、個人、地域、政府、国際レベルで取り組むべき解決策について議論した。12月の第2回 WWL 課題研究交流発表会は「リスクマネジメント - コロナ禍における高校連携」をスローガンとし、ディスカッションのプログラムでは、「環境」「科学」「福祉」「教育」「ビジネス」「防災」「Education」「Communication」の8つをテーマとして設定した。
- b. イノベティブなグローバル人材に必要な資質の育成を養うカリキュラムとして学際的科目と探究活動について研究を進めた。令和元年度実施の学際的科目（「家庭基礎」「情報の科学」「グローバルスタディーズ」）に、令和2年度からは「学際国語」と「学際リサーチ」が加わり、西岡伸紀カリキュラムアドバイザー同席の研修会は2回実施された。8月の管理機関主催の研修会では、シラバスやコロナ禍における実践について協議を行った。11月は、同アドバイザーによる「学際国語」と「学際リサーチ」の授業参観の後に、研究協議を行った。1月に実施した第2回 WWL フォーラムでは、6科目（「家庭基礎」「情報の科学」「GSIA」「学際国語」「学際リサーチ」「GS IIC」）の公開授業を実施した。GS IIC では、グローバルマインドを育成に寄与する模擬国連のカリキュラム開発を神戸市外国語大学の西出教授の助言を受けながら行った。
- c. 設定したテーマと関連した外国語や文理両方の複数の教科融合内容を扱う学校設定科目
- (ア) グローバルスタディーズ IA (GSIA)
- 2年生で行う課題研究に向けた基礎学習を行う科目で、「言語」「宗教」「人口」「教育」「文化」「経済・産業」「環境」を題材とした。日本人英語教員と ALT が担当した。
- (イ) グローバルスタディーズ IIB (GS IIB)
- SDGs の 17 の目標より絞り込んだ 5 つの分野（教育、環境、健康、福祉、人権）から、各自が関心のあるテーマを選び、課題研究に取組み論文作成を行った。英語科教員、ALT、外国人講師等が担当した。また、ポスター作成やプレゼンテーションも実施し、校内外での発表に向けての指導も担当教員が行った。
- (ウ) グローバルスタディーズ IIC (GS IIC)
- 地歴公民科教諭、英語科教諭と ALT の 3 名が担当する学際系の学校設定科目である。生徒が複眼的な視野を育成し、社会の問題解決を目指して、主体的に学び考える日本語と英語による授業を展開した。政治・経済・環境・人権・教育に関する諸問題をテーマに取り上げ、考察してきた。また、オーストラリアオリンピック委員会主催による交流プログラム「オーストラリア・オリンピック・コネクト 2020」を姉妹校のオーストラリアのウエストボーングラマースクールと協働で取組んだ。

(エ) グローバルスタディーズⅢC (GSⅢC)

英語科教諭3名とALT2名が担当する3年生対象の選択科目である。7月のWWL International Conference Online 2020では“Risk Management: International Cooperation during the COVID-19 Global Crisis”をスローガンに「教育」「健康」「経済」「人権」「情報」をテーマにプレゼンテーションの準備を行った。会議の後は、ポスターの作成や啓発のプレゼンテーションを行うなど、問題解決のために実際に行動を起こした。コロナ禍において、国際協力の重要性が高まっていることを鑑み、10月から「武器輸出」を議題に模擬国連に取組んだ。

(オ) 学際国語

学際国語は、令和2年度初めて開講された。2年生普通科英系・文系の生徒全員を対象とした。文理融合、教科横断的な学びを念頭に置きながら、テーマを「リスクマネジメント」に設定した。国内外には多くの「課題(リスク・禍)」が存在するが、それを他人ごとではなく「自分ごと」として受け止め考える姿勢を培うことを目的とした。令和2年度は国内外における「課題(リスク・禍)」について、日本語で書かれた文章または資料を総合的に読解し、また新たな視点からそれらの問題を考察できるよう、多様な方法知の習得にも取組んだ。主体的・対話的で深い学びとなるよう、いわゆる講義型は少なくし、ペアワークやグループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等、生徒たちが活動の主役になることも目指した。

(カ) 学際リサーチ

学際リサーチは教科「学際」として、令和2年度初めて開講した授業であり、2年生普通科英語系、文系生徒対象の選択科目である。教科「学際」の目標はイノベティブでグローバルなリーダーに必要な新しい価値観を創造する力を複数科目で育成することである。また科目「学際リサーチ」の目標は、人権、環境、経済に関するテーマについて、社会的視野と科学的視野から考察することにより、人権問題や環境課題、経済問題に対しての本質的な解決方法を考え、社会に提案することであった。

- d. 令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により、カリキュラムの一部として海外研修を実施することができなかったが、新型コロナウイルスを「リスク」の題材とし、海外姉妹校(オーストラリア、台湾、フィリピン、スウェーデン)と国内連携校のインターナショナルスクールと7月にオンライン会議を行った。実際の国際会議は国際科3年生が中心であったが、1、2年生は、探究活動の一環として日本語で議論に参加した。
- e. 文理融合テーマを扱う学際的科目として「家庭基礎」(1年)と「情報の科学」(1年)に加え、令和2年度から普通科2年生対象に「学際国語」と「学際リサーチ」が開始された。また、国際科では、「グローバルスタディーズ」(1～3年)が学校設定教科として展開されている。「総合的な探究の時間」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、フィールドワーク等の計画変更を余儀なくされたが、多くの科目で新型コロナウイルスに関する探究活動が実施された。ALネットワークを活用し、3年生は国際科と普通科理系を対象にWHO神戸センターテクニカルオフィサーによるコロナに関するオンライン英語講義“Global Health Development and COVID-19 Pandemic”、2年生対象にAI企業OPTiMジェネラルマネージャーによる「IoT・AIを使って実現する新しい未来像」の講義、1年生対象に「探究の日」に国際機関や企業、NPOなど13の団体による講義やワークショップを開催した。

学年	学際的科目	
	必修	選択
1	総合的な探究の時間 家庭基礎 情報の科学 グローバルスタディーズ IA (国際科)	
2	総合的な探究の時間 学際国語 (普通科：英系・文系) グローバルスタディーズ IIB (国際科)	学際リサーチ(普通科：英系・文系) グローバルスタディーズ IIC (国際科)
3	総合的な探究の時間	グローバルスタディーズ IIIC (国際科) 学際フードデザイン (普通科：文系)

f. Society 5.2 (Society 5.0 の先) で必要とされる力 (Neo MAKS) を育成するために、「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」を展開した。「高度な学び」と「協働グローバル創造活動」は対面とオンラインを組合せて継続実施した。専門家による講義やワークショップは、学際的科目や探究活動の一環として、オンラインで10回、対面で20回実施した。

7月の高校生国際会議 (WWL International Conference Online 2020) では、海外姉妹校の参加は4校 (例年は5校) となったが、拠点校のドイツ人留学生 (新型コロナウイルス感染拡大のため留学途中で帰国のためドイツから参加) や新たな連携校となったインターナショナルスクールのカナディアンアカデミー教員、生徒が参加した。過去4回の国際会議では議論には国際科生徒のみの参加であったが、令和2年度は拠点校の普通科1、2年生にも対象を広げた。国際科3年生が橋渡し役となり、日本語で議論に取り組んだ。12月の第2回 WWL 課題研究交流発表会は、共同実施校、連携校や近隣の高校の12校が参加し、プレゼンテーションを行った。令和元年度より、発表テーマはより多様化し、英語での発表の割合も高くなった。ディスカッションのファシリテーターも拠点校だけでなく、2校の共同実施校の生徒たちが、8つの内4つの分野を担当するなど、運営の面でも協働が進展した。1月の WWL フォーラムの探究発表にも共同実施校3校、連携校1校の生徒が発表者として参加し、意見交換にも加わった。

1月の神戸コミュニティフォーラム (神戸市国際課主催) は外国人も含めた神戸市民が英語で語り合うことを目的としており、オンラインで実施された。トピックは「やさしい日本語」で、講義を聞いたのち、拠点校の生徒8名がディスカッションのファシリテーターを務めた。

事業名 (参加)	日程	主な活動や必要な資質	Neo MAKS
高校生国際会議 (拠点校、海外連携校4校、国内連携校1校)	7/7-9	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑨⑩⑫
WWL 課題研究交流発表会 (拠点校、共同実施校3校、 国内連携校3校、近隣5校)	12/25	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑧⑩⑫
WWL フォーラム (拠点校、共同実施校3校、国内連携校1校)	1/28	発表・意見交換・交渉・ 提案・時間管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑧⑩⑫
神戸コミュニティフォーラム (拠点校)	1/23	司会・運営・発表・意見・交換 交渉・提案・時間・管理・柔軟性	①③④⑤⑥ ⑨⑩⑫

- g. 連携大学の1つである神戸市外国語大学と、第2言語について先取り履修の可能性について協議を行った。
- h. 国内外で行われる課題研究やオンラインプログラムを紹介し、参加に向けての指導や、オンラインの環境を整備した。「AI翻訳プロジェクト」等の産官学の連携プロジェクトを通してより高度で先進的な学びを提供した。

オンライン プログラム (主催)	日程	参加人数等
高校生国際交流の集い2020 (関西学院大学)	8/11	2名 2位入賞
2020年度夏季高校生グローバルスクール (東京外国語大・東京農工大・電気通信大)	9/20-21	1名
第3回全国高校生SRサミット FOCUS (立命館宇治高校・立命館大学)	11/14-15	2組
Google Mind the Gap (Canadian Academy)	11/17	4名
リサーチフェア (関西学院大学)	11/21	6名 実行委員会特別賞
イオン1%アジアユースリーダーズプログラム (イオン)	12/17-19	3名
One World Festival for Youth (関西 NGO 協議会)	12/20	3名 優秀賞
リサーチフェスタ (甲南大学)	12/20	8組 クリエイティブテーマ賞
全国フォーラム (文部科学省)	12/20	5組
Google Mind the Gap オンラインプログラミング	1/12・18	3名
WWL・SGH×探究甲子園 (関西学院大学他)	3/21	3名
広島県における WWL コンソーシアム構築支援事業 国内フォーラム (広島県教育委員会)	3/27	3名
The Global Enterprise Challenge	3/28	2組

産官学プロジェクト	主催	日程	参加人数
AI翻訳プロジェクト紹介	神戸市企画調整局	10/16	8名
みらい翻訳 演習	拠点校	10/31,11/13	8名
AI翻訳ワークショップ	みらい翻訳、NTT	11/27	8名
オンラインインターン	みらい翻訳	12/11	13名
AI翻訳アプリオンラインワークショップ	NTT	1/22	9名

- i. 毎年ヨーロッパなどから年間に2～4名の長期留学生を受け入れているが、令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大により、留学生の受け入れは実施されなかった。
- j. 海外姉妹校との交流以外に、「日本文化紹介」の授業ではイランの女子高校の生徒と文化について、「総合英語 IB」の授業ではインドの高校とアメリカのテキサス州の高校と Feature Writing の合同プロジェクト学習を実施した。有志生徒により、フランスの高校と日本語による手紙交換も行った。新型コロナウイルス感染拡大による世界的危機の中、国際交流を継続する努力を続けた。

8 目標の進捗状況, 成果, 評価

- a. 令和2年度のプログラムの検証として、令和元年度に作成した Neo MAKS 力に関する質問に学際的科目や WWL 行事に関する項目を加えた質問紙調査を拠点校の3学年に行った。3年生は12月に実施し、国際科回答数 77、普通科英系回答数 74、理系回答数 42、文系回答数 13 であった。2年生は2月に実施し、国際科回答数 77 普通科英系回答数 44、理系回答数 65、文系回答数 163 であった。1年生の1回目は6月、2回目は2月に実施し、1回目の回答数は国際科 79、普通科 269、2回目は国際科 76、普通科 264 であった。本事業の中心となる2年生を中心に分析を行った。

(1) 「学際的学び」「高度な学び」「協働グローバル創造活動」の検証

2年生対象の学際的科目の検証として、「自分の考え方や行動に影響を与えた科目や取組」について調査を行い、選択した生徒の割合を算出した(下記表①参照)。国際科2年生の「グローバルスタディーズ(GS) IIC」、普通科英系・文系対象の「学際リサーチ」は選択科目であり、それぞれ77人と18人が母数となる。「社会科」と「理科」が融合した科目である「学際リサーチ」の母数は少ないが、履修したほとんどの生徒の考え方や行動に影響を与えた科目であったことが示された。英語で課題研究を行う「GS IIB」、「社会科」と「英語科」による連携科目である「GS IIC」も、約半数の生徒が「影響を与えた科目」として選択した。「学際国語」はクラスサイズ40名の必修科目であるが、約30%の生徒が選択し、必修科目の中では高い結果となった。「総合的な探究の時間(総合)」における「学修インタビュー」は、3割の生徒が選択した。自分で主体的に取組む活動や、対話的な学びは生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。

表①「自分の考え方や行動に影響を与えた科目」として選択した生徒の割合()母数

	科目(人)	総数	国際科	普通科英系	普通科文系	普通科理系
学 際 的 科 目	GS IIB	77	49.4%			
	GS IIC	31	54.8%			
	学際国語	200		27.3%(37)	29.4%(163)	
	学際リサーチ	16		85.7%(7)	100%(9)	
	総合	342	7.8%(77)	4.5%(37)	6.7%(163)	6.2%(65)
	学修インタビュー	342	31.2%(77)	31.8%(37)	30.7%(163)	44.6%(65)

「高度な学び」として対面やオンラインによる講義やワークショップを実施した。2年生は、20代女性によるフィリピンの貧困問題の取組やオリンピックに関する講演、1年生は認知症に関する講演が生徒の印象に強く残ったことが分かった。自分たちと近い年代や、タイムリーな話題、実生活に関係するものは「影響を与える」ことが示された。WICO2020(国際コンファレンス)は、実際のオンラインの会議を見学し、より直接的な関わりをした国際科2年生の割合が高い結果となった。また、WWL課題研究交流会は、ディスカッションファシリテーターを務めた普通科の6割強の生徒が選択しており、イニシアチブを取る経験は生徒の考え方や行動に影響を与えることが示唆された。比較対象の体育大会や校外学習の数値が示すように、体験的な行事は生徒により影響を与えることから、令和3年度の協働創造活動は生徒が深く関与できるように工夫が必要なが示された。

表② 「自分の考え方や行動に影響を与えた行事」として選択した生徒の割合 () 母数

	学年・科 総数	2年国際科 77	2年普通科 265	1年国際科 77	1年普通科 269
WWL 行事	講演会	10.4%	6.8%	9.2%	4.6%
	探究の日			36.8%	14.0%
	WICO 2020	24.7%	5.6%	1.3%	2.3%
	WWL 課題研究交流発表会	60% (15)	66.7% (6)	18.4% (24)	
	WWL フォーラム	24.7%	7.4%	18.2%	11.4%
行事	体育大会	24.7%	40.9%	36.8%	41.3%
	校外学習			42.1%	36.3%

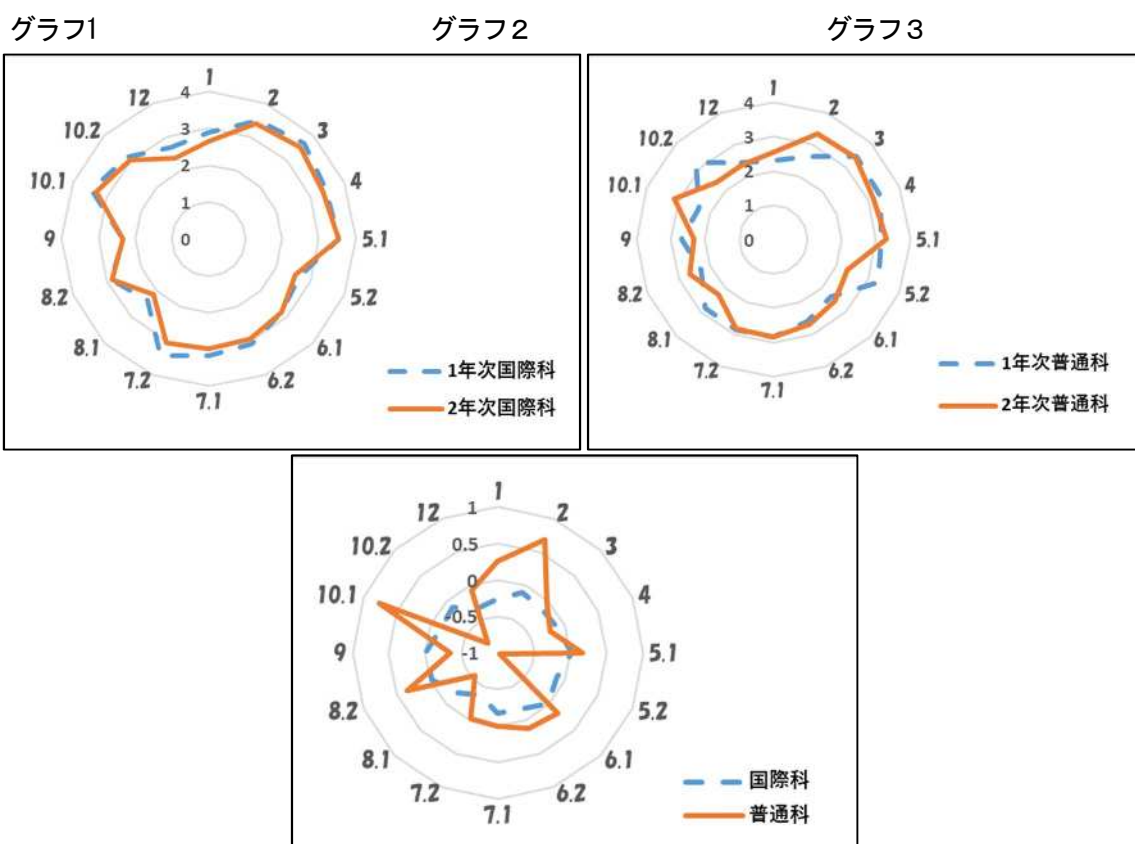
(2) Neo MAKs 力の分析

Neo MAKs 力に関する質問項目を16設定した。回答方法は1～4の4件法で、1は「あてはまらない」2「どちらかといえばあてはまらない」3「どちらかといえばあてはまる」4「あてはまる」とした。学年内の経年比較と同時期の学年間比較を平均値と値の増減値を用いて行った。下記の表はNeo MAKs 12の力と質問紙の項目番号と文面の対応表である。

	12の力	項目番号と文面
Mind	① 物事を多面的に見る力	1 物事を様々な角度から見る事ができる
	② 他者の痛みを理解しサポートする力	2 人には思いやりをもって接している
	③ 多様性の中で協働する力	3 複数の人数で話し合うと（一人より）良い考えが生まれると思う
	④ 経験と知識を融合させる力	4 何か問題が生じたとき、解決するために自分の知識や経験を生か（そうと）している
Attitude	⑤ リーダーシップを取り責任をもって調整する力	5.1 議論の際、自分だけが意見を述べることなく、参加者それぞれの意見を聞くことができる
		5.2 集団での問題解決場面では、率先してリーダー的な役割を担うことができる
	⑥ 柔軟性に富んだ問題解決力	6.1 複雑な問題に直面しても、問題の要点や構造を整理しながら考えることができる
6.2 問題解決などで、自分のやり方が、目的に合っているのかどうか途中で確認している		
Knowledge	⑦ 自国や他国の文化・歴史に関する深い知識と理解	7.1 日本の文化や歴史について興味がある
		7.2 世界各国の文化や歴史について興味がある
	⑧ 科学的知識を活用する力	8.1 科学的に考えたり、調べたりすることに興味がある
		8.2 関心のある事柄について、その問題の本質を発見したり、原因を考えることができる
Skills	⑨ ICTを主体的に使う力	9 ICT(コンピューターやインターネットに関連する情報通信技術)に興味がある
	⑩ コミュニケーション力	10.1 人に伝えるときに、分かりやすく説明しようとしている
		10.2 よく知らない国の人たちと親しくなれる自信がある
Neo	⑪ 普遍的正義感	
	⑫ 新しい価値観を創造する	12 将来、新しい分野を研究したり、新しい産業を創り出した

① 令和2年度2年生の変化（2年次と1年次の経年比較）

2年生の12の力を1年次と2年次の各項目の平均値の変化で検証した。グラフ1は国際科、グラフ2は普通科の1年次と2年次各項目の数値を、グラフ3は1年次から2年次の値の増減を表したレーダーチャートである。国際科は各年次間の各項目の変化は少ないが、全項目の総数値（-2.27）は下降した。普通科の総数値は0.51下降だが、いくつかの項目に変化が見られた。グラフ3が示すように、項目2、8.2、10.1が上昇した。特に8.2と10.1に関しては総合の時間や本年度から開始された学際科目での取組の効果も考えられる。一方、項目5.2、8.1、10.2は下降しており、5.2と10.2に関しては海外修学旅行などの行事が中止となり、また部活動の活動も制限があったため、リーダーシップを発揮したり、交流する機会が少なかったことが理由として考えられる。

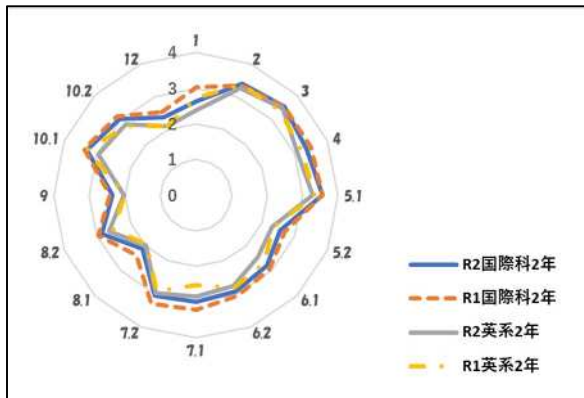


② 2年次における特徴（令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較）

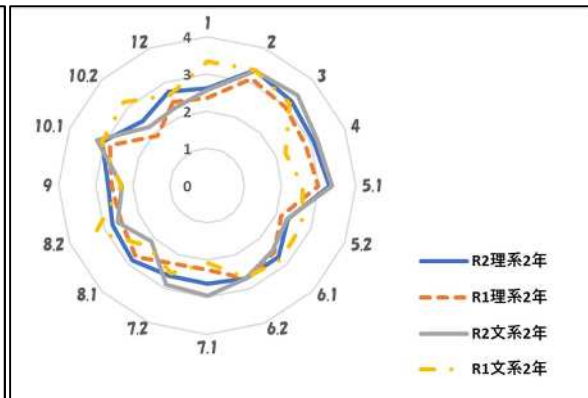
令和元年度から始まったWWL事業の2年次での効果と、新型コロナウイルス感染拡大による影響を検証するために、令和2年度2年生と令和元年度2年生の比較を国際科、普通科英系、理系、文系においてそれぞれ比較した。グラフ4は国際科と英系、グラフ5は理系、文系の令和2年度と元年度の2年次における各項目の数値を表したレーダーチャートである。国際科では項目2以外の値が下降し、総計値も2.14減少した。最も下降した項目は1(-0.39)で、物事を多面的にみる機会や経験が少なかったことが推察される。英系の総計値は微減(-0.58)であったが、項目1は国際科と同様に最も下降した(-0.34)。上昇したのは項目7.1(+0.33)であった。理系の総計値は3.87上昇し、下降した項目はなかった。理系の特徴としては項目8.1と12があげられる。専門性

を活かそうとする姿勢の表れと考えられる。令和元年度2年生と比較して特に上昇した項目は10.2 (0.53)、7.1 (0.37)、7.2 (0.35)、12 (0.3)であった。文系の総計値は微減(-0.3)だったが、変動が大きいことが分かった。顕著に上昇したのは項目4 (+0.9) 5.1 (+0.78) 7.1 (+0.88)で授業や体験が影響していると推察される。下降が顕著な項目は1 (-0.76) 10.2 (-0.95) 8.2 (-0.63)であり、新型コロナウイルス感染拡大のため、物事を多面的にみる機会や交流の機会が前年度よりも少なかったことも原因と考えられる。

グラフ4



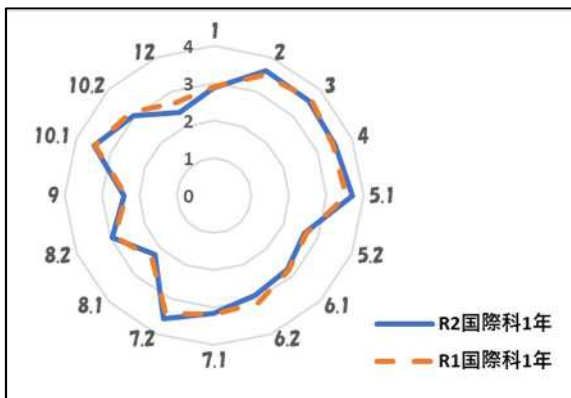
グラフ5



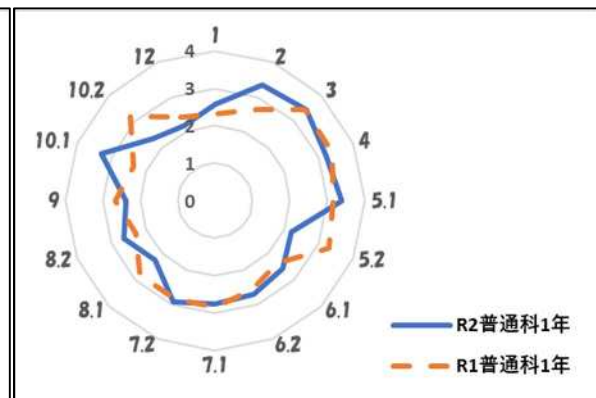
③ 1年次における特徴 (令和2年度1年生と令和元年度1年生の比較)

1年生の取組においても本年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響をうけたため、令和2年度1年生と令和元年度1年生の2月の時点での調査の結果を比較した。グラフ6は国際科、グラフ7は普通科の各項目の数値を示したレーダーチャートである。国際科は総計においては-0.28の微減となったが、傾向に大きな変化はなかった。項目12の差(-0.29)が最も大きかった。普通科は、総計では-0.39の下降となったが、各年度によって数値に差がある項目が7個あり、異なる傾向が示された。令和2年度1年生の数値が高いものは項目1 (+0.26) 2 (+0.70) 8.2 (+0.36) 10.1 (+0.94)であり、総合で取組んだ探究や発表体験の影響も考えられる。令和元年度1年生の数値が顕著に高いものは項目5.2 (+1.11) 8.1 (+0.57) 9 (+0.28) 10.2 (+0.85)であり、実際にリーダーシップを発揮したり、交流する機会が確保されていたと推察される。

グラフ6



グラフ7



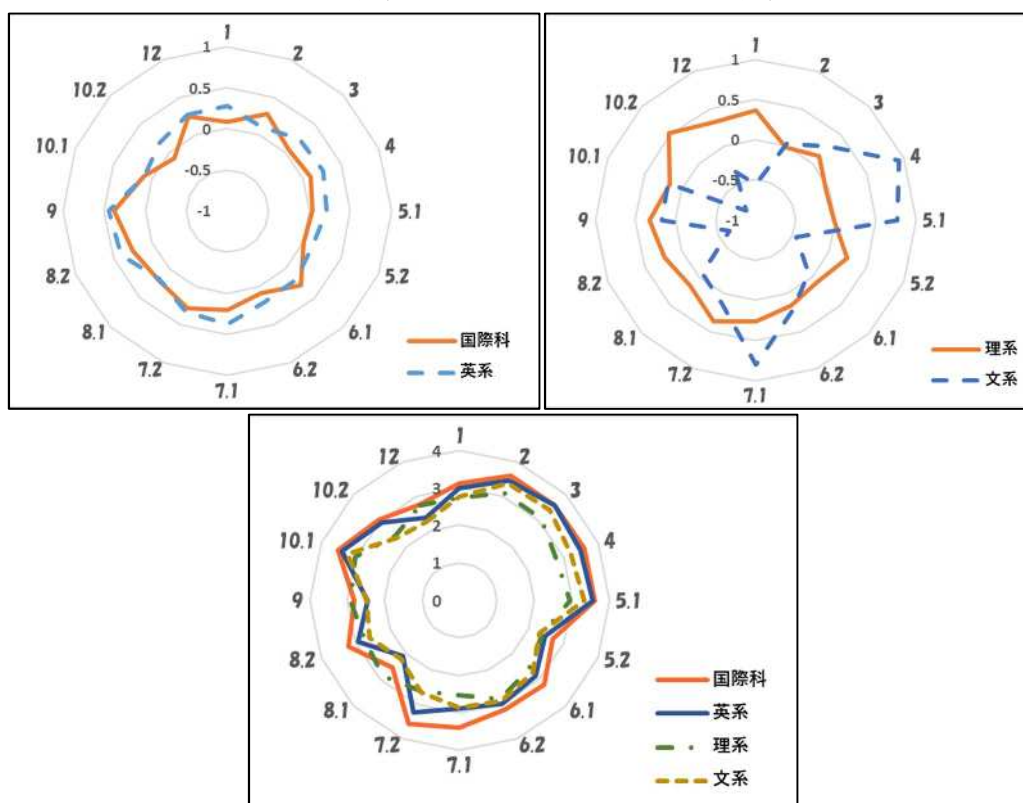
④ 3年次の特徴 (令和2年度3年生の2年次との経年比較)

最終到達点である3年生の2年次との経年比較を通して今後の展望を考察する。国際科 (+2.46) 普通科英系 (+3.86)、理系 (+3.22)、文系 (+0.57)とも総数値においては3年次に上昇が見られた。グラフ8は国際科と英系、グラフ9は理系と文系の2年次から3年次の数値の増減を表したレーダーチャートである。国際科と英系と比較すると理系と文系は項目によって差があり、特に文系が顕著である。グラフ10は各項目の数値をまとめたものである。MAKSの中のMind(人間力)は全般的に育成されているといえる。Attitude(実践力)では、調整力は備わっているがリーダーシップ力には課題が残る。Knowledge(知識)に関しては文理融合の取組、Skills(運用力)に関しては、ICT分野の取組の必要性が示された。本事業3年目となる令和3年度の3年生の結果を注視したい。

グラフ8

グラフ9

グラフ10



(3) 令和3年度の方向性

単年度のみの分析となるが、各学年において、新型コロナウイルス感染拡大による取組の制限が12の力の育成に影響を与えていることが示唆された。オンラインとオフラインを駆使した学際的協働の機会を創出することで、課題となる分野の力の育成を、ALネットワークを活用して図ってきたい。

b. ALネットワークが果たした役割等について

- ① オンラインの環境整備によるコロナ禍における協働活動の継続実施
- ② オンライン、オフラインによる「高度な学び」の提供
- ③ 拠点校や共同実施校、連携校との繋がりの方の更なる強化とそれぞれの強みの活用

c. 短期的な目標は、ALネットワークインフラ整備、カリキュラム開発、協働グローバル創造活動の実施であった。高等学校間の関係は、合同会議や事業を通じて共同体としての連携を強固なものにすることができたが、情報の共有・交換のための情報共有ネットワークの構築は、個人情報に関する神戸市のセキュリティーポリシーと照らし合わせ、慎重に対処する必要があり、令和2年度は確立することはできなかった。カリキュラム開発においては、カリキュラムアドバイザーの助言のもと、学校設定科目「学際国語」と「学際リサーチ」を開始した。令和2年度のWWLフォーラムでは、学際的科目の公開授業、共同実施校、連携校と探究活動発表交流会を実施した。協働グローバル創造活動では、直接交流はできなかったが、オンラインの導入により、高校生国際会議を開催した。第2回WWL課題研究交流発表会では、拠点校、連携校、近隣の高校から160名の生徒がオンラインで参加し、文理融合の探究活動の発表の機会を提供することができた。

中期的な目標はALネットワークを活用した令和3年度実施予定のWWC（ワールド・ワイド・コンファレンス）の実施と探究活動の深化、学際科目のカリキュラム開発である。WWCでは、令和2年度の高校生国際会議における経験を活かし、対面とオンラインの両方を融合させた会議を想定している。全体会は座席数約2000席の神戸文化ホールにて、基調講演、高校生による共同宣言を計画している。また、産官学のプログラムも推進していく。

長期的目標は、新時代のALネットワークの構築である。事業指定終了後も成果を活かすために、カリキュラムマネジメントで開発された学際科目を新カリキュラムに反映させる。2025年に開催される大阪万博で、ALネットワークで育成した「NeoMAKS」力を駆使した高校生による神戸パビリオンの開催を目指す。

9 次年度以降の課題及び改善点

- ・大学教育の先行履修の可能性について、連携大学と管理機関との間で話し合いを今後も継続する。
- ・海外研修やフィールドワークの代替となるプログラムを検討する。
- ・WWL事業終了後も、構築されたコンソーシアムを維持し、この事業で取り組んでいた諸活動をどのように持続可能にしていくのか模索していく。

【担当者】

担当課	神戸市教育委員会事務局 学校教育課	TEL	078-984-0716
氏名	中嶋 秀	FAX	078-984-0717
職名	指導主事	e-mail	shu_nakajima@office.city.kobe.lg.jp

カリキュラム・アドバイザー 兵庫教育大学大学院 教授 西岡伸紀

WWL コンソーシアム構築支援事業では、「リスク」を含む「社会的課題全般」のテーマに取り組み、資質として Neo MAKS (12 の力) の育成が図られている。そのための中心的科目である学際的科目には大きな役割が期待されるが、科目のねらいや内容を概観すると、学際的科目の構成には以下のような複数のポイントがあると考えられ、科目群が意図をもって構成されていることがわかる。

ポイントとしては、まず“複眼”の育成が挙げられる。具体的には、理系と文系の視点から授業や課題研究が行われたり、社会科教員、理科教員による科学的視野や社会的背景などの観点から調査、分析がなされ現況や課題が発表されたりしている(学際リサーチ)。また、地歴公民科教諭、英語科教諭、ALT の指導の下、政治・経済・環境・人権・教育等の問題が取り上げられている(グローバルスタディーズⅡC)。専門の異なる教員の協働のもと、多様な課題を通して複眼が育成されている。複眼は、SDGs の複雑な様々の課題、その解決方策について考え論じる際に欠かせない。好ましくない事象に対して、発生確率や発生時の影響を併せて方策を考えるリスクマネジメントにおいても必須である。現在の重要課題である新型コロナウイルス感染症の対策についても、一次・二次・三次予防の視点から感染予防や重傷化予防対策がとられ、個人的取組及び社会的対策として、新たな生活様式、ワクチン接種などが併せて実施されており、対策には多重性や多面性が認められる。感染症を、差別や偏見の防止、経済活動とのバランスなどの視点から論じるには、さらに高度な複眼や広い視野が欠かせない。

次に、取り上げる課題研究のテーマに、学年段階に応じた広がりがあることが挙げられる。テーマについては、1年では、1学期には自己に視点を当てているが、2学期には「社会的に見ておかしいこと」として社会的な視点から課題を捉えている(探究)。テーマの内容についても、1年では「家事分担のシミュレーション」など家庭や社会の基本的な課題を取り上げ(家庭基礎)、2年では内容を拡大し、人権問題や環境課題、経済問題(学際リサーチ)、リスクマネジメント(学際国語)、国際的視点から見た政治・経済・環境・人権・教育(グローバルスタディーズⅡC)など多彩なテーマが取り上げられている。

さらに、課題研究の方法を取り上げていることがある。研究方法の学習は重要である。課題研究では、様々な課題を多様な方法で解決するが、適切な方法の採用がより良い解決につながり、方法の共通理解がより良い討議を実現する。1年で既に、探究活動の進め方、背景、リサーチクエスションの設定、発表の仕方、コンピュータリテラシーなどが挙げられる(情報の科学・GSIA)。その中で、リサーチクエスションの設定は特筆すべきである。それは研究の本質に大きく関わっており、大学生、大学院生のみならず、研究に携わる者にとっても絶えず問われるもので、悩ましくも意義深く刺激的な課題である。

最後に、課題研究の発表や意見交換の機会を様々設けていることがある。2年生以降でも、GSⅡB、学際国語、学際リサーチ等の授業で行われる課題研究、共同実施校や連携校と協働して行われる発表会、国際会議等の様々な機会が設けられている。背景や専門性、研究方法の異なる人達の発表、相互の意見交換やディスカッションは、参加者の意見や感想によれば、課題研究能力の向上のみならず、大きな刺激になっている。

以上のように学際的科目を概観すると、複数の学年にわたる学習によって、課題研究に関する資質・能力が、段階的に、広がりをもって育成されていることがわかる。

なお、最近、探究活動として、インターネットの情報検索に留まらない活動の意義が見直されている。それは、例えば、インタビュー、調査、実験、制作など、人やモノに直接関わる体験を伴う活動であるが、そこでの実感や経験は大きな財産になる。また、これらの探究活動では、予想や仮説に従った典型的な結果を得ることは難しい場合が多い。実社会や現実の様々な要因が結果に影響することが一因であるが、このような結果のばらつきや仮説に反する結果などは、現実の難しさや面白さを感じたり、結果の適用できる範囲や限界を考えたりする機会になる。それらの実感や考察は各研究固有のものであり、発表の際に触れていただきたいものである。

神戸大学 准教授 山下晃一（事業検証委員会）

本年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため、教育段階の如何を問わず我が国の教育機関における国際交流の取組全般が中止や延期に追い込まれる等、非常に厳しい状況に直面しました。本事業も、当初に予定していた行事の多くが他国の学校との交流を中心とする取組であったため、事業の存続自体が危ぶまれる状態であったことと推察します。そのような中で、決して後ろ向きになることなく、こうした状況下においてもできることは何か、また、むしろこうした状況下だからこそできることは何か、拠点校である葺合高等学校の尽力はもとより、共同実施校、連携校、大学、企業が総力を結集して話し合い、知恵を絞り、当初の予定と遜色のない取組を展開されました。上記のような厳しい環境変化にあつて、当初の事業計画と同等の効果を持つ代替的な企画を急遽、再立案・実施され、十分な成果を挙げたものと評価できます。主な具体的達成点として注目されるのは、以下の3点です。

第一に、国内外の複数校による取組の着実な遂行と、ネットワーク及び実施体制の拡充です。7月には「高校生国際会議（WWL International Conference Online : WICO）2020」を開催して、5カ国（地域）6校が参加してリスクマネジメント・国際協力をテーマに議論しました。臨時休業等で開催が危ぶまれましたが、1学期のうちに迅速に開催できたことは、本事業の企画立案・実行能力の高さを示すものであり、本年度のその後の取組に関するノウハウの開発や自信につながったと推測できる点で高く評価できます。また、共同実施校・連携校や近隣のSSH校等（全12校）が参加した「第2回 WWL 課題研究交流発表会」も12月に開催されています。

さらに、参加校の増加も特筆に値します。9月には市内のインターナショナルスクールであるカナディアンアカデミー（神戸市東灘区）、10月には神戸市立六甲アイランド高等学校が、それぞれ連携校として加わりました。とりわけ後者の参加で、神戸市立高校（全日制）全校で取り組む体制が整ったこととなります。これにより、次年度に予定される本事業の集大成「World Wide Conference（WWC）」の実施に向けた体制が充実すると同時に、それぞれ特色を発揮してきた市立高校が相互に刺激し合い、さらに発展するための好機が作られたこととなります。事業完了後も持続的・自律的な市立高校教育の発展が神戸市全体で進むものと期待されます。

第二に、外部の産官学との積極的な連携の推進です。神戸市企画調整局つなぐラボ、（株）NTTドコモ、（株）みらい翻訳との連携の下で、拠点校の生徒がAI翻訳サービスに関する勉強会、ワークショップ、インターンシップを経験しています。1月には、神戸市（市長室国際部国際課）と（公財）神戸国際協力交流センターが主催した「神戸コミュニティフォーラム」において、拠点校の生徒複数（8名）がディスカッションのファシリテーターを務めるという荣誉に浴しました。これは外国人を含めた市民が英語で語り合う企画であり、そこで高校生が大人を相手に高校生がリーダーシップを発揮したこととなります。その他、拠点校と共同実施校（科学技術高等学校）が、神戸市とスペイン・バルセロナ市による連携国際ワークショップ「World Data Viz Challenge」に参加する等、各校の特色やこれまでの取組を活かし、さらに発展させる連携が進められました。

第三に、拠点校における学際的カリキュラムの発展です。昨年度から学際的科目として開設した（グローバルスタディーズ、家庭基礎、情報の科学）に加え、今年度から「学際国語」と「学際リサーチ」が開設されています。どちらも普通科2年生の英語系・文系の生徒を対象としています。前者は全員必修科目としてドキュメント資料の解析とプレゼンテーション作成について学びます。後者は選択科目として、人権問題・環境問題・経済問題に関する自分なりのソリューション提言を目指して学びます。これらは、既存教科の蓄積を土台として無理なく現実的に出発しながらも、従来の教科の枠に囚われず、相互を有機的に結びつけてイノベティブな発想を導き、さらにはグローバル化時代にふさわしい提案作成型の学びを目指すものです。この点で、学校の実情に出发点を置きながら、実行可能な文理融合・学際的カリキュラムを他校でも開発するための貴重な手がかりを与えてくれる経験になることが期待できます。以上より、前述のように十分な成果を挙げたと判断するものです。